博物館めぐり－7

下呂温泉合掌村　四国村

佐々木　　享

合掌村

飛騨・白川村の合掌づくりはよく知られているけれども、白川村はいかにも山深く、ここまで足を伸ばすには相当の覚悟が要る。しかし下呂温泉の合掌村まで行けば、温泉につかったその足で見事な合掌づくりの民家を観ることができる。

下呂は、鉄道なら名古屋から特急で１時間40分、クルマなら中央高速道の中津川インターから国道をまっすぐに50分で行ける。いまや観光の街となった高山の少し手前だ。

ここの合掌村は、下呂町直営の公園だけれども、役所風な空気を感じさせないゆったりした気分になれるし、施設も充実している。「村」は道路をはさんで上部には、ふるさとの杜（もり）と称して、木々に囲まれた山のくらし館、モノレール、森の未来館等々の子ども向きの施設が揃っている。山のくらし館には、林業に用いられた種々の工具が展示されている。杜は高台にあるので、合掌づくりの民家を眺めて楽しむこともできる。私はこちらをほぼ素通りして、一路、民芸の郷（さと）へ向かったけれども、山の生活を学び、かつ充分に楽しむことができそうである。

民芸の郷に入るとすぐ目の前に現れるのが、高さ12.3mという合掌づくりの大きな民家「旧大戸家住宅」である。これは1963年に白川村から移築した住宅で、現存する合掌づくりの民家でも大きい方に属する由であり、国の重要文化財に指定されているいわばホンモノだ。かやぶき屋根、木造４階（屋根裏を加えると５階）のうち、１、２階が開放されている。１階は、家具調度品、什器、台所をふくめて、使われていた当時の状況がほぼ再現されている。天井はむしろ現今の普通の家屋のそれより高いようにおもわれた。黒びかりした手すりにつかまって２階にあがると、多数の農器具、長持ちなどの民具が展示されていた。ここに来ると、がっちりした柱組みもよく見える。クレーンなどない時代によくも組みたてたものだと改めて感心する。

このほか園内には、村の芝居小屋を再現した竹原文楽上演館、これも合掌づくりの、やや小ぶりな旧伊並家を移築したお食事処「合掌茶屋」、合掌づくりの事務所・売店などがある。人形100体を洞奥（ほらおく）一郎さんが１人で操る竹原文楽を、上演日でなかったために実見できなかったのは残念であった。ビデオで見ることはできる。

「合掌茶屋」で一休みしてから、民俗資料館（旧岩崎家）、人形展示館を観覧した。ひなびたひな人形の大きなセット、人形文楽に使われるすべて洞奥さん手作りのきらびやかな人形の数々がみごとだった。

少し離れて、陶器の絵付けや紙すきを体験学習させてくれる斐騨工房、漉倉がある。ここはみやげ物の店にもなっている。

狛犬博物館は、多分、園内唯一の鉄筋コンクリート２階建ての近代建築で、１階では飛騨の一刀彫りの展示と実演をしており、一隅にはこの地域に多いといわれる大ぶりの円空仏の一体が目にとまった。２階は沖縄のシーサーをふくむ全国各地から集めた多種多様な狛犬が展示場されていて、見あきない。

この下呂温泉合掌村は、温泉街にありがちな、まがい物を集めた歓楽場ではないことを念のためにつけ加えておく。

いまや観光地としてあまりに著名になった

高山と下呂を組み合わせたら、楽しく充実した日程となろう。

四国村

四国の古い住宅、建築物を集めた民家の博物館・四国村は、香川県高松市にある。高松市といえば広大、美麗な栗林公園が有名であるけれども、ここまで来たら四国村を見逃すてはない。

本州と四国を結ぶ瀬戸大橋（鉄道と自動車道）が開通したので、高松行きの時間は著しく短縮され、新幹線を岡山で降りてＪＲマリンライナーに乗り換えると１時間で高松に着く。このため、宇野から高松へ渡る旧来の船便は、便数が減った。もっとも、往復ともマリンライナーに乗ったのでは瀬戸大橋という長大なつり橋を眺めることはできない。

ＪＲなら高松の２駅先きの屋島下車、高松から琴電で行くのもオツかも知れない。源平の合戦で名高い（観光地化した）屋島の入口に、民家の博物館「四国村」がある。

入るとすぐ左手に、かずら橋という渡るにはスリル満点のつり橋、ついで、文久年間のもの小豆島から移築した農村歌舞伎の舞台がある。円形にくり抜いた廻り舞台は、縁の下で人間が廻したのだという。このひなびたたたずまいは、入村者をいっきょに幕末期の農村の雰囲気にタイムスリップさせる。

小ぶりな民家山下家の次に、重要有形民俗文化財に指定されているという「砂糖しめ小屋」がある。ここに来て、江戸時代には砂糖が讃岐（さぬき）の特産品だったことを教えられる。同時に、私たちが現今とくに気をとめないで使っている砂糖の大部分が輸入品であることをふと憶いださせる。

この小屋は、香川県内に１棟だけ残っていた珍しいものの由。こういうものを遺しているところに、博物館の存在価値がある。かやぶきの屋根は珍しく（と私にはおもわれた）円錐形で、31本の柱で立つ円形の小屋の中では、３個組み合わせた石臼（車白という）の腕木を牛が引いてまわしていたことが知られる。石の間に砂糖きびを差し込んで汁をしぼった由である。こうしたことを見聞きしただけでも、ここに来たかいがあった気分になる。

旧河野家住宅、旧木下家住宅はいずれも国の重要文化財に指定されており、江戸時代の（上流の）民家の端正な趣を伝えている。これら民家には、農具などの民具も展示されている。

高知県から移築した楮（こうぞ）蒸し小屋とその蒸しがまも私には珍しかった。土佐が高級和紙の産地たることを知ってはいたけれども、この前近代の生産工程や装置を知らなかったからである。

村内にはこの他四国各地から移築した民家、丸亀藩御用蔵、醤油倉、屋根がわらに工夫のある土蔵、丸亀藩番所、周囲を石垣で囲った漁師の家、などがある。中規模の民家の床（ゆか）が板でなく竹敷になっているのも面白かった。民家のいかついはめ込みの仏壇はむかしをしのばせる。それぞれ往時のままによく整備された中をのぞくと、種々な什器、農具なども展示されている。

昼食には、おいしいさぬきうどんを楽しむことができる。

その他の民家園

なお、日本の古い民家をまとめて観たいということならば、すでに紹介した金沢にある江戸村、名古屋の博物館・明治村にもあるし、日本集落博物館（大阪府豊中市）、川崎市立民家園（神奈川県川崎市）など少なくない。各地の都道府県立博物館内にあったり、江戸東京博物館のように分館にしているところもある。北海道開拓記念館の「開拓村」も、少し趣の変わった民家として面白い。いずれも、家屋だけでなく、往時の生活をしのぶことができるよう工夫されている。

私の知見では、どちらかというと西の方に少ないようにおもうので、適当な博物館があったら教えてほしい。

（愛知大学短期大学部）